



装備製作系

チートで




異世界を自由に

生きていきます




Author: **tera**

Illustration: 三登いつき



チビ
ウィンストの相棒のドラゴン。
体の大きさを自由に変える
ことができる。

ウィンスト
ゴブリンネクロマンサーから
本来の姿に戻った小賢者。
普段は爽やかだが、
酔っばらうと……




ノーマリー
冒険者パーティー
《平々凡々》のリーダー。
親しみやすい、
いじられキャラ。

登場人物紹介


MAIN CHARACTERS




オスロー
アーティファクト
研究科の学生。
空飛ぶ魔導機器の
開発を目指す。



トウジ(秋野冬至)
あきの どうし
本編の主人公。30歳。
元フリーターで異世界召喚に
巻き込まれる。
ネーミングセンスが適当。



ポチ
コボルト。
トウジのサモンモンスター。
毛並みが良くコボルト界では
イケメン。



イグニール
冒険者の女性。24歳。
強力な炎の魔法を操る。
母の形見の杖を愛用する。

第一章 過労死間際の救世主、ヒヒイロカネ

大迷宮『深淵樹海』での騒動からストリアにて三十歳の誕生日を迎えた俺——あきのとうじ 秋野冬至は、ロツク鳥ちようのワシタカくんに乗ってようやく拠点にしているギリスへと帰ってきた。

「ただいまだしーっ！」

「あんまりはしゃぐなよー」

玄関先からピユーツと部屋へ飛んでいくダンジョンコアのジュノーの後ろ姿を目で追う。

今回も約一ヶ月近い留守だったから、久々の我が家にテンションが上がっているようだ。

アルバート商会の令嬢であるマイヤーを一人で留守番させてしまったので、大目玉を食らうかもしれない。

深淵樹海で手に入れたチョコレートを献上してご機嫌取りをするしかないな……と、そう思いながらリビングへ向かうと、何やら声が聞こえてきた。

「……あれもあかん、これもあかん、どないしたらえんや……えつと……ここがこうなって、ああなって……」

白いTシャツに黒いパンツ一枚という姿でメガネをかけたマイヤーが、椅子にあぐらをかきながら何やらボソボソと呟つぶやいていた。

美しかったサラサラの金髪は、ボサボサになって後ろで無造作くに括くられている。「うお……」

俺はその光景を見て、思わず声を出してしまった。

テーブルの上に書類をどっさり置いて虚うつろな目でペラペラと捲めくりながら、手元にあるそるばんのよなものをパチパチと弾はじいては数字を書き込んでいる。

パチパチ、カキカキ。

何とも異様な雰囲気だった。

「コケエ……」

マイヤーのペットである鷄ていみたいな魔物のストロング南蛮なんぼんは少しげっそりとしており、帰宅した俺たちを見るや否や助けを求めるように駆け寄ってくる。

餌えさ、ちゃんとあげてるのだろうか？

いや、そもそもマイヤー自身が大丈夫か？

その顔つきは、ストロング南蛮以上にげっそりとしており、目の周りには飛行船の建造をしているオスロー並みに隈くまができていた。

「ちよっとマイヤー、トウジ以外の人もいるからそんな格好はダメでしょ」

この場には、ワシタカくんに乗って一緒に帰ってきたパインのおっさんもいるので、見かねた冒険者のイグニールが歩み寄る。

ちなみにパインのおっさんはポチの料理の師匠であり、ジュノーがダンジョンコアだつてことを知っているの、特に何も言わずにジュノーが作った俺たちの拠点きょてんについてきている。

「んあ？ あれ、イグ姉？ あれ、トウジ？ いつの間に帰ってきてん？」

ようやく気づいたマイヤーは椅子から立ち上がったが、フラツとよろついた。

「マイヤー、大丈夫か？」

慌あわてて駆け寄ってイグニールと一緒に彼女を支えると、マイヤーはてへへと笑う。

「すまんすまん、ちっと仕事を立て込んで……ほんで学校の試験も被かつてしまうから余裕がなかったんよ……」

「すぐにでも休んだ方がいいよ」

「そうね、トウジの言う通りよ」

俺とイグニールで声を掛ける。

明らかにオーバーク、疲勞困憊ひろうこんばいだつて様子が一目でわかった。

「今、C・Bファクトリーの連中としのぎを削る戦いの最中やから無理や。うちがここでへばって休んだら負けるんや」

そう言いながら、何とか椅子に座って作業を続けようとするマイヤーだった。

少しだけ話を整理しよう。

C・Bファクトリーとは、ギリズ指折りの魔導機器を扱う大商会のこと。

しかし表の顔とは裏腹に、禁止されているものの裏取引や密輸、倫理に反した魔導機器を作り、流通させようとするなど、内部はかなり腐っていた。

殺された元代表のオカロと研究所に監禁されていた天才研究者オスローを救い出し、腐敗していた内部のゴタゴタを目につく範囲で片付けた。そしてオカロとオスローをマイヤーと繋げ、新しい魔導機器メーカーでも作らないかという話になっていたのが、深淵樹海に赴く前のことだった。しかし他国の商会であるアルバート商会が、いきなりノウハウもなく新規参入するのは難しい状況だった。そこでちょうど繋がりのあったイグニールの友人であるローディの勤める研究所に出資を行い、そこを起点に飛行船製作に着手しよう……って段階で話は止まっていた。

俺が深淵樹海に向かったのは、飛行船の材料である竜樹を求めてのことである。

「とりあえず今日は一旦お仕舞い。寝なよ」

「あかん！ まだ終わってない！ 嫌や！」

お姫様抱っこでマイヤーを部屋に連れて行こうとすると、彼女は手足をバタバタとさせた。

「今日中に予算案とかまとめて、他の商会に交渉に行つたるんや！」

「交渉？」

「せやで、ええもん作ります言うて、色んな商会と繋がらないと売れるもんも売れん」

どうやら研究開発費を国の補助以外にも引つ張ってくるために色々と考えていたらしい。

資金繰りなんてアルバート商会の大資本と俺の金があれば良いと思っただけでそうではなく、各所商会と関係を持ってこの国での販路を構築していくのが重要とのこと。

そりやそうか、商品があっても売り場がなければどうしようもない。

「それにな、金も引つ張つてこなあかんねん。トウジ個人の飛行船を作るコストを除外してもな……資金繰りが結構きついねん……」

「えっ、マジで？」

そこそこ潤沢なお金や素材を準備しておいたはずなのだが、どういうことだろうか。

その言い方だと、間接的に俺の飛行船費用が高張つてるように聞こえる。

「この一ヶ月でオカロさん繋がりの研究員をそれなりに引き抜いたんや」

「うん」

「それで、全員で飛行船の設計に着手してるんやけど……」

オカロが自身の人望をもとに何とか引き抜いてきた人手は、元C・Bファクトリーの研究員である。

優秀であるが故に、元いた職場と同額で引き抜いたとしてもかなりの費用がかかり、現状人件費も資金をかなり圧迫しているようだった。

「……帰りが遅くなつてすまん」

そんな状況になっていったつてのに、俺はチョコレートで誕生日パーティーをしていた。申し訳ない気持ちでいっぱいになる。

「ええねん、トウジは経営の素人しらうとやで？　ここはうちの腕の見せ所やろ？」
リビングから自室へと連れ出され、ベッドに寝かされたマイヤーは言う。

「普通の資金繰りはこうやってやるもんやし……うちがトウジに頼まれたことやから……」

「マイヤー……」

健気けんげだ、頑張り屋さん過ぎる。

俺も見習わなきゃいけない精神だった。

そんなマイヤーに朗報を伝える。

「竜樹は確保してきたから、その分のコストは全部研究所の人件費に回してくれ」

「え、ほ、ほんま？」

「うん、苦労したけどただでゲットしてきたから、気にしなくて良いよ」

当初の予定では5億ケル使つて竜樹を買っつて計画だったから、その分が浮いた形である。それに苗木苗木ももらつてきたので、あとはダンジョン内で育てるだけなのだ。

なんだつたら増やした竜樹を売つても構わない。

資金繰りはこれで解決できるはずだ。

「でもあかんわ」

しかしマイヤーは首を横に振つた。

「そこに頼つてちゃ、結局トウジ任せやる？　それは違うやん」

彼女はさらに続ける。

「ぬるま湯に浸かっつたらいつまで経つても発展せんから、どっかで苦労しんど」

販路や開発費用を求めて対外的に交渉することは絶対に譲ゆずらない。

そんな覚悟の決まった目をしていた。

「アルバート商会を使つた販路はどうなの？」

国内じゃなくてもトガルで売れば、こんなに大変な思いをしなくても済むかもしれない。

「認可を受けてないと国外輸出があかんくてな、そのためには実績とかがいるんよね……」

「なるほど」

認可がないと密輸扱いになつてしまふらしい、知らなかった。

アルバート商会の名前があれば何でも上手くいくと適当に考えていた俺が恥はずかしい。

「ほんでな、研究員を引き抜かれた奴やつさんの圧力とかあつて上手くいかん」

「それでしのぎを削つてるつて話だったのか」

ギリス国外の販路、そこに乗せれば勝ちであることをマイヤーは理解しているようだった。

俺でも考えつくことだから、そりゃそうか。

「せやで、圧力があつたとしてもうちの方がええつて思わせたら勝ちやねん」

マイヤーはベッドから身体を起こして立ち上がると拳をグツと握り締める。
 「飛行船の材料費やら製造についての懸念はなくなったから、あとはC・Bファクトリーに代わるブランドを立ち上げるんや。確かにシエアナンバーワンの敵は強い。けどな、うちらにも負けにくいものも手が揃つとるから、絶対にいけると確信しとる！ ……つて、あれえ、足元がああ〜」
 「おわっ」

再びふらついて俺にもたれかかるマイヤー。
 いくら頑張ろうと気を引き締めても、疲労は確実に溜まっていく。

これ以上は寿命を削ってしまいかねないから、やはり寝た方がいいだろう。

「マイヤー、一旦休息を取りなよ。効率だつて落ちるから」

「……にはは、やつぱりそう？」

「うん、そこまで根詰めて頑張ってくれるのはありがたいけど、健康第一だよ」

プライベート優先でも、仕事が生きがいでも何でもいい。

だが、しつかり健康であることが大前提である。

深淵樹海に入る前に体調を壊して色々と気がついたんだよ、俺は。

精神的疲労はボーションを使つてもプラーシボ効果以外は決して回復しない。

結論、寝た方がいいのだ。

「はいトウジ、ポチとパインさんが作ってくれたホットチョコレートドリンクよ。マイヤーに渡し

てあげて」

「おお、ありがとうイグニール」

俺はイグニールから受け取った飲み物をマイヤーに渡す。

疲れた時にチョコレートなのは、どの世界線でも一緒なのだ。

「なんやこれ？」

「深淵樹海で採ってきたチョコレートだよ」

「甘くて美味しいから疲れもバッチリとれるし！ トウジ、あたしの分は？」

「今は我慢しろよ……？ もしくはポチにもらつてこい」

はい、と空気を読まずリビングに飛んでいくジュノーをやれやれと見送る。

「ジュノーは相変わらずやんなあ……」

「そうだね」

いつでも元氣印のジュノーを見たマイヤーは、張っていた気が和らいだようだった。

少しだけいつもの自然な笑顔を取り戻した彼女に言う。

「飛行船が完成するまでは遠出しなから、みんなで辛い時期を頑張ろう」

「トウジ……」

涙ぐむマイヤーを見て、色々と背負わせて一人にしてしまったことを申し訳なく思う。

商人歴は長く腕もあるのだが、まだ二十歳になったばかりの女の子だ。

親元からまずーっと離れたばなしで寂しい気持ちもあるだろう、俺だってそうだ。

「とにかく今日はゆっくり休んで、みんなでご飯を食べよう」

「うん……」

ポチとパインのおっさんが腕によりをかけて栄養満点のご飯を作ってくれる。

まともに食事をしてないみたいだったから、身体が美味しい料理を求めているはずだ。

身体は資本で、その大元は食生活にあるからね。

「そうだ、言い忘れてたけど……ただいま」

「うん、おかえりトウジ……」

留守の苦勞を^{ねむい}、俺は改めてマイヤーにそう言うのだった。



「んなつはつは！ 迷惑かけたわ、もう元気になったで！」

「コケッ！」

翌朝、元気な様子のマイヤーとストロング南蛮がリビングに姿を現した。

顔色は良く隈もほとんど消えていて、肌も髪も昨日とは見違えるほどの艶^{つや}やかさである。

「復活したみたいね」

「そうだなあ」

イグニールと二人で朝食を待ちながら、マイヤーの様子を見てホッと一息吐く。

やっぱり健康が一番だ、目元がパンダは好きじゃない。

俺はガリガリよりも健康的な女性の方がタイプです。

「おはようマイヤーの嬢ちゃん」

「オン！」

キッチンで朝食を作る二人の師弟^{しでい}もマイヤーの様子を見て微笑んでいた。

「ほんまに！ ポチとパインさんの料理はたまげたまんやわ〜！」

「コケッ！」

「そうだろそうだろ？ 俺特製、次の日元気ハツラツ丼はすげえだろ？」

腕を組んで誇らしげにするパインのおっさんが口にした言葉は、昨日の夕食の料理名である。

豚肉とニンニクの芽、長ネギやらその他野菜モンスたちをおろしニンニクを加えた特製^{いた}ダレで炒

め、炊きたてご飯の上に海苔^のを敷き盛り付け、卵黄を落とし白胡椒^{しよこま}をかけたもの。

日本で言うところのスタミナ丼だ。

特別な力が働いているのか何なのか、食べた全員がハツラツとした朝を迎えた。

旅の疲れなんて一切感じさせないほどに。

いやむしろ、その日の夜から元気ハツラツになってしまえば寝る前にすぐ悶々^{もんもん}としたぞ。

「チョコレートつてのもすごいやんな！ 鏡見たら見違えたで！」

「カカオの美容効果らしいわよ？ 甘くて美味しい綺麗なになれるってすごいわよね」
マイヤーとイグニールが女子トークをしている。

髪や肌が艶やかになっているのは、寝る前に飲んだホットチョコレートのパワーである。
元がすごく綺麗なイグニールやマイヤーは、さらに綺麗になっていた。

「うちもイグ姉の美貌に近づけたんかなあ？」

「何言ってるのよマイヤー。あなたの方が可愛いじゃない。髪なんてサラサラだし」

「えへへ、ほんま？」

イグニールに褒められたマイヤーは、嬉しそうに制服姿でくると回っていた。

抱き抱えられたストロング南蛮がハイテンションのマイヤーに巻き込まれて目を回し、コレク
ションピークのコレクトが心配するいつもの光景である。

「なあ、トウジ？」

「ん？」

「どう？ うち、可愛い？」

「抜群だね」

「にやはは、なんか小っ恥ずかしいわあつ！ つしや、今日も一日頑張ってくでー！」
マイヤーもジュノーと同じ元気印のハツラツ娘である。

そんな女性に隈は似合わない。

しかしまあ、ここまで変わるって異世界版チョコレートつてとんでもないな。

「せや、オスローにも元気ハツラツ井とチョコ分けてあげたらどうなるんやろ？」
マイヤーからフツと出たそんな疑問、俺とイグニールに衝撃が走った。

「た、確かに……どうなるんだ……？」

ヴィジュアル系のアイシャドーみたいな隈がなくなったオスロー。

想像もつかなかった。

「彼女、自分のことに関しては無頓着だから、私たちからおすすめしてあげましょ？」
「せやね、あのごっつい隈が全部なくなったら見違えそうやわ」

イグニールとマイヤーが言う。

カッサカサの肌もチョコで年相応になったりするのだろうか、疑問は尽きない。

長年、その辺の美意識には無頓着で研究ばかりしていたオスローだから、チョコですら太刀打ち
できなさそうな、そんなオチが想像できる。

「ほい、朝飯ができたぜ！ みんなで食べよう」

「アオン！」

朝食が出来上がったようで、ポチとパインのおっさんが運んでくる。

「今日の朝飯はなんなん？ ひっさびさにまともな朝食やから楽しみやわ〜」

「おう、今日は俺とポチ特製の今日も元気に頑張る丼だ」
「どどん、と丼がテーブルに配膳はいぜんされた。」

朝から丼ものは重たいなー、なんて思っていたのだけど、ふんわりスクランブルエッグの上には釜揚げかまゆげしらすと細切りのハム、かいわれ大根とベビーリーフが散らされている。意外にもあっさりとした見た目で美味しそうだった。

今日も元気に頑張る丼、か……良い名前で頑張れそうだ。

「トガル首都にある店舗でも朝限定で結構売れたメニューだぜ？」

「へー、朝限定とかでメニュー変えてたんですか」

「おうよ、女性従業員に牛丼重たいからもっとヘルシーで見た目が華やかなのが欲しいって言われて作ってみたもんだ。それが意外と男どもにもウケてよ！」

値段は300ケテルとかなり安めの値段にしたのも功を奏して、気軽に真似して作れるからと、トガルではちよつとしたブームになったらしい。

すげえやおっさん、さすが伝説の料理人だ。

「卵がふんわりしてるうちが一番食べ頃だから、みんな食べようぜ！」

「そうですね。じゃあ、食べよっか」

パインのおっさんの言葉に俺も同意する。

手を合わせてください。それでは——いただきます。



朝食を摂とったらマイヤーは学校へ、俺たちは研究所へと足を運ぶことにした。

竜樹を入手してきたことの報告と現状把握を兼ねてである。

「……ああ、トウジさんですか。お久しぶりですね、どうぞ」

研究所の従業員入り口より事務所へ向かうと、やけに疲れた顔の経理の人がいた。

この人は、アルバート商会から経理サポートとして出向してきた人である。

「だ、大丈夫ですか？」

「ま、まだ他の人たちに比べたら……経理はマシですよ……」

「う、うん？」

ご案内しますと言われて、例の親子がいる工房へと通される。

研究所の事務所から少し離れた場所にある工房、そこは研究開発したものを実際に製作する場所であり、二人はそこにいるそうだ。

「アオツ!？」

工房の扉が見えてきた途端、ポチが身体をビクビクツと震わせたかと思えば、いきなり鼻を押さえてバタリと倒れてしまった。

「ポチ!?」

「ア、アオ……」

力なく倒れたポチの様子に愕然とする。

「なんてこった……それほどまでにヤバいのか……」

昨日のマイヤーの様子や先ほどの経理の人の顔色を見て薄々感じていたことだった。いつでも元気なマイヤーですらグロッキーな状態になるほどの状況である。

だとしたら……だとしたら……!!

超弩級のワーカホリックであるあの親子は、いったいどうなる?

ちよつとやそつとの仕事量では満足しない奴らだ。

人の何倍も平気で働く、それが生きがいな連中だ。

俺とは真逆、対角線上、対極に位置する存在だ。

「とりあえず二人は中にいますから私はこれで!」

「えっ」

ここまで案内してくれた経理の人が、バビュンと逃げるように立ち去ってしまう。

「マジか」

ごくりと喉を鳴らしながらドアノブに手を掛ける。

正直、入りたくないが、入らなきゃいけない。

ち、ちくしょう!

「にやむにやむ……くさつ、ねえ、くさいし、早く用事終わらせて帰るし」

ドギマギしていると、俺のフードからのそのそと起きてきたジュノーが、掬めつ面で寝ぼけながら扉を開けた。

その瞬間、ワツと押し寄せる臭気。

イグニールが火属性の魔法を放つたら、引火するんじゃないかってくらいの臭い。

「シュコー、シュコー、パパ、あれ取って、シュコー……」

「シュコー、これだね? シュコー……」

そんな中でオスローとオカロの親子は、ガスマスクのようなものを着けて作業していた。

「お前ら! そこまでするくらいなら換気しろよ!」

何だよこの状況、意味がわからないし笑えない。

人死んでんねんで! 主にポチが!

「何でガスマスクなんだよ。異常な状態だつてことに気づいてんじゃないか!」

急いでインベントリから浄水を取り出して振りまく。

バシヤバシヤバシヤ。

すると、浄水の力によって強烈な臭気が少しずつ収まっていく。

どんな強烈な臭いでもこの通りスッキリ、浄化の力に関しては天下一品だ。

もうこの親子まとめて浄水風呂に漬^つけ込んでやるうかって感じである。

「何をするトウジ。このマスクが汚染された大気中でも使えるかどうか試していたんだぞ」

「そうそう、大空の上って空気が薄いからね。それを見越して実験中なんだ」

しれっとそんなことを言^{のたま}う髪ボサボサ親子。

こ、こいつら……!」

「それはわかるけど、異臭騒ぎになってるよ……」

「異臭? しつかり密閉していたから大丈夫なはずだが……?」

オスローはそんな風に言っているが、扉前でポチが気絶したのが何よりの証拠だ。

今だっつとピクピクしてるわけで、可哀想^{かわいそう}って思わないのか。

このまま文句を言っても埒^{らち}が明^あかない。

屁理屈^{へりくつ}という理論武装において、オスローに勝てないと思った俺は、必殺の呪文^{じゅもん}を唱える。

「オスロー、完全にポチに嫌われたな、これ」

「ぐっ」

そう言っつてやると、オスローは膝をガクツと曲^まげた。

「どうしたんだい我が娘!」

「だ、大丈夫だ、パパ。ちよつと足にきただけさ」

「足!?!」

ふはは、知ってるぞ。

オスローは無類のモフモフ好きであり、ポチの毛並みをかなり気に入っているってこと。

「オスロー、ポチは臭いに特にうるさいぞ」

「し、知ってるがそれが何か? これは実験だから致^{いた}し方^{かた}ない部分も……」

「もう二度と抱っこさせてくれない可能性があるけど、それでいいならいいよ」

「ぐはっ!」

その言葉でオスローはダウンし、あとは親父のみとなった。

「一つ聞きたいんだけど、お前ら何日間ここに籠^{こも}ってるんだ?」

「うーん、四週間くらいだね。もしくは三十日前後」

「一ヶ月って言えよ……」

「うん一ヶ月。その間ずっと閉鎖空間の空気の淀^{よど}みをチェックしてたんだよ」

上空は地上とは大気が違っていて、全員が俺たちみたいに装備で固めた高耐久ではない。

そんな大気の違いを何とかしようとする、内部を密閉しなければならぬ。

飛行船は何日も空を旅する可能性があり、そんな閉鎖された状況下で、どれだけマスクが空気の淀みに耐えることができるのかを測っていたそうだ。

「外から空気を取り入れて循環させるとしても上空では何が起こるかわからない。不測の事態を考慮して循環装置は必要最小限でなければならぬだろう? これはある種のストレスチェックさ」

「もし密室で異臭騒ぎになっても結構耐え切れそうだね！」

ガスマスクをつけたままのオカロが、朗らかなテンションで親指を立ててサムズアップ。

「いやまずは空気清浄機作れよ！」

ガスマスクがあるからってこれだけの異臭だ、服に臭いが移るだろ。

「何を言うトウジ。このガスマスクを元に空気清浄機をこれから作るのだよ」

「そ、そうなんだ？」

そんなオスローの言葉。

一応考えていたらしい、馬鹿なのか天才なのかわからんな、この親子。

ちなみにこの一ヶ月間、風呂にも入らず工房で仕事をしていたそうだ。

この二人の常軌を逸したハードワークに引つ張られるように、他の研究者たちも仕事に追われるようになっていったのが、經理の人の疲労の正体である。

元C・Bファクトリーの代表とその娘である魔導機器の申し子。

立場が上の存在が帰らず仕事をしていたら、そりゃ他の人も帰りづらい雰囲気にもなる。

「じ、事情はわかったけど……程々にしなよ……」

「命に関わることだよ？ 限界値ってそれだけ重要なのさ」

オカロがしれつとそんなことを言う。

娘もあかんタイプだが、その父親もやっぱりあかんタイプであった。

よく働くのは良いことだが何事にも限度つてもものがあるわけで、程々に手を抜いて仕事をするよ
うな人間を連れてくるべきだな、これは……。

「いやー、浄水の力はすごいね！ あつという間に異臭が消えちゃったよ！」

異臭のバンドボックス解放からしばらくして、とんでもなかった臭いは完全に消え去った。

一切の残り香を許さず、浄水を霧状にして研究所各所に噴射したのである。

火災用に取り付けていた散水装置が、火災ではなく異臭に対して力を発揮していた。

「高コストになるが、飛行船内部で浄水を循環させ空気清浄を行えないだろうか？」

「さすが娘、僕も考えていたよ。同時に飛行船内も一定温度に保つことができるね」

「浄水自体が魔力を蓄積しているし、予備魔力として非常時に使えるかもしれない」

「そこは娘に任せるよ。僕は実際に試作機準備してテストしておくから」

浄水シャワーを浴びてスッキリとした表情の親子は、さっそく浄水の結果を受けて飛行船内部に

組み込もうとしていた。

転んでもただでは起きないというのは、こういう連中のことである。

俺の周りって話が進まない連中が多いと思っていただけ、こいつらは逆に話が早いタイプだった。

「で、トウジ、君はいつたい何をしにきたんだい？」

差し入れに持ってきたチョコレートをポリポリと摘みながら、何食わぬ顔をするオスロー。

「竜樹持ってきたから、その報告だよ……」

「おおっ！ 竜樹を採ってこれたのかい、トウジくん！」

「苦労しましたけどね」

深淵樹海ではボチをやられてしまったり、左腕を失ってしまったたり、でもお陰で新たな仲間と力才、他にも色々とお目当てのものを手に入れることができた。

まだ詳しく見えないが、特殊強化における費用が30%オフになる星降りほしふりの夜よるを利用して、イグニールの杖つえも強化できた。

スペリオル装備がいったいどれ程の強さになったのか、それは依頼を受けて冒険に出た時にでも語らせてもらおうと思う。

「竜樹はどこにあるんだい？」

「大き過ぎてここでは出せませんが、しっかり量は確保してますんで」

「了解だよ。試作を終えて実際に作り始める段階で使おうか」

オカロが言うには竜樹の出番は、普通の木材を使って試作やテスト飛行をしてからだそうだ。

高価な代物しろもので盗難の恐れもあるから引き続き俺が持つておいてくれとのこと。

確かに5億ケテルはくだらない素材だから、持っているのがバレると色々と厄介ごとを招きかねないので、大事にインベントリに保管しておこう。

「ふむ、量があるとなれば……竜骨りゅうこつ以外にも骨組みから張り板、全てに竜樹を用いて製作できる可

能性もあると？」

「娘ちゃんさ、僕の話聞いてた？ あの竜樹だよ、そんな現実的じゃないよ」

「聞いてたさ。だが最高の飛行船を作るのならば、その全てを竜樹にしたいと思わないか？」

オスローは続ける。

「理論値最強で最高の飛行船を作るには、全てを竜樹にするのが必要不可欠さ」

「おおっ……」

理論値最強という言葉聞いて、何とも心が動かされそうになってしまう俺がいた。

大は小を兼ねるといように、最強は全てを兼ねるのだ。

後でこうしておけばよかった、なんてならないように最初から良いものを作っておくのが鉄則である。

「ああ、トウジくんも……そういうタイプの人間だったね……」

オカロは、オスローに流される俺を見て額たまを押さえてため息を吐いた。

「引き抜いた研究員から聞いたんだけど、C・Bファクトリーも飛行船作ってるよ」

「そうなんですか？」

「うん、諦めの悪い奴らだからね。竜樹を使った飛行船は僕らの切り札みたいなものだから、無駄遣いは願けないよ？」

オカロは、可能な限り竜樹を使う箇所を少なくして俺以外の船にも使おうと思っていたらしい。

トライアンドエラーで竜樹を無駄に消費する可能性も減るし、竜樹を使っているともなれば安全性や丈夫さをアピールできて、運用する際の強みとなるからだ。

「なるほど。でも足りなかつたらまた採りに行ってきますよ」
足りない分はまた採りに行けば良い。

もう深淵樹海のダンジョンコアであるグルーリングたちとは繋がりができています。

苗木だつてもらつてきたんだからどんどん増やしていけば良いのだ。

「ええ……まあ採ってきた本人がそう言うなら頷くしかないけど大丈夫かい？」

「大丈夫です」

作ろうじゃないか、最強で最高の飛行船を。

こればかりは妥協するな、と俺の心が叫んでいるのだ。

空の快適空間、是が非にでも欲しいのである。

「クフフ、私とトウジは飛行船を通して価値観を共有しているからな、まるで心を通わせた夫婦のようにトウジの好みが私にはよくわかるのだよ、パパ」

「何となく父親としては複雑なセリフだけど……トウジくん、そうなのかい？」

振り返つて俺に視線を向けるオカロに断言しておく。

「いや、わかんないです。パンダと心通わせたことないし」

「パツ——失礼だな君は！ シャワーを浴びたからマシになつてるだろう！」

「どう、ポチ？」

俺の足元で行儀良く話を聞いていたポチに尋ねると、無言でパイッとそっぽを向いた。

「ぐふっ！ 思ったよりメンタルにくる……」

オスロー、完全に嫌われたな。

俺と心を通わせたいなら、まずはポチと通わせることだ。

「……まあ良い、前置きが長くなってしまったが一応全体的な設計図と模型は完成している」
オスローは、自分の実績をポチへ誇示するように、厚紙で作られた模型を取り出す。

精巧に作られた模型は、飛行船の全形だった。

長く大きな気囊の後部に昇降舵、方向舵を取り付けたテールフィンがあり、その下に細長い搭乗スペースがペツと取り付けられていた。

搭乗スペースの両脇にも翼のようなものが存在し、こいつも舵の役割を果たしつつ筒状のスラスターが取り付けられていて推進力を得ている。

「これが設計図をもとにして作った模型さ」

「おお……」

搭乗スペースから察するに、気囊はかなり大きなものになりそうだった。

ある程度は予測していたのだが、空を飛ぶためには致し方ないのだろう。

「もう少し軽量化しようと思えばできるが、四六時中ロッキ鳥を出して飛行船を引けるわけじゃな



「いだろう？」

「そうだね」

「大方想像はついてるだろうが、急制動はまったく利かない。しかし何の障害もない空を飛ぶのだから基本的には直線距離での飛行になるだろう。目的地が近くなれば大きく旋回してスピードを落とすとして、徐々にその場に止まるような構造とする。垂直に下りることも、気囊や船の昇降舵を連動させて走らせながら高度を落とすことも可能だ」

「なるほど……つてことは、ワシタカくんの腕の見せ所つてことか」

面倒な操作を覚えるつもりはない。

上昇、下降、それだけでければ十分なのである。

浮かぶことができれば、あとはワシタカくんが運んでくれて、目的地に着いたら止まって地面に下降する。

それでも操作が必要な場合は、サモンモンスターに任せようと思っていた。

「従魔を訓練するのは君の役目じゃないのか？」

「あ、うん……そうなんだけど……うん……」

何故かは知らないが、サモンモンスターは俺よりずっと器用なパターンが多いのである。

「マニュアルとかあったらもらえるかな？」

「詳しい説明は全てが出来上がってから渡そう」

「ありがとう」

「マニュアルを読んで振りをして、俺の目を通してサモンモンスターに読ませよう。手っ取り早くて簡単だ。」

「さて、ここまでの案だったのだが……実はもう一つあるのさ」
「ん？ もう一つ？」

首を傾げる俺に、オスローはもう一つ精巧な模型をテーブルに載せる。

その模型は巨大な気囊は付いておらず、至って普通の船のような見た目をしていて。

「今までは気囊に特殊な気体を込めて空に浮かぶ、というコンセプトだった。実際にそれはコスト的にもかなり現実的なアイデアだと私は思っている」

しかし、とオスローは首を横に振りながら言葉を続ける。

「突き詰めて考えた結果なのだが、実はこの気囊がそこはかとなく邪魔なんじゃないか……という結論に至ったのだよ」

「ええ……？」

「何だろうか……最初はこれで浮かぶぞ、とテンションを上げていたのだが、改めてよく考えてみた結果、ふと思ったのだよ……弱い、と」

もし気囊が破裂してしまった場合、どうすることもできない。

オスローは直感で弱いと思ったのだそうだ。

理論上最高、最強だと確信して素材も厳選したのに、彼女は弱いとってしまったらしい。

その言葉が頭の中でちらついて我慢ならなくなったオスローは、模型製作の合間を縫って考えに考え抜いた。

「もつとスマートにできないかと試行錯誤した結果、いっそのこと船の内部に気囊を収納してしまうことを考えた」

「ほうほう」

魚の浮き袋のような構造なのだろうか？

「しかし、それも何となくスマートじゃなく、そもそも浮力が足りないと思った結果……ついに私はこんなものを作り出してしまったのさ」

「こんなもの？」

回りくどい口調の後で新たに見せられたのは、内部に淡いオレンジ色の光を宿した小さな結晶だった。

「綺麗ね」

「綺麗だし」

今の今まで黙って話を聞いていたイグニールとジュノーが、宝石のような結晶を見て、そんな感想を口にする。

「クエックエックエツ!!」

コレクトはひたすら騒がしかった。

その興奮度合いから、目の前にある結晶はかなり価値の高い代物だつてことがわかる。

「パパも知らないんだけど、娘ちゃん何それ？」

「これは恐らく私史上、稀代の大発明と言える代物さ」

全員が首を傾げる中で、そう言いながらオスローは結晶に魔力を流し込んだ。

オレンジ色が強く輝き始めた瞬間、すぐ側にあつた飛行船の模型がふわりと浮き始める。

浮かぶところまで再現されているのかなんて思っていると、室内にある資料やら備品やらも一緒にふわふわと浮かび始めたのだ。

「うわっ!？」

今度は俺たちまで浮かび始め、まるで無重力空間に来てしまったかのようなだった。

「オン!？」

「な、何よこれ!？」

「わあ！ みんなあたしみたいに浮いてるし！ なにこれー!」

「む、娘よ！ パパこんなの知らないんだけど!？」

慌てふためく俺たちに、オスローはニヤリと口角を上げながら言った。

「――浮遊結晶。我ながらとんでもないものを作り出してしまったものさ」

「浮遊結晶!？」

その名の通り、とんでもない効果だった。

オスローを起点として、全てがふわふわと浮かんでしまう光景は圧巻である。

「しかし、一つ懸念点がある」

オスローの言葉の後、結晶にピキッとひびが入った。

「魔力の消費量が膨大かつ、結晶自体が非常に脆く、すぐに割れてしまうのだ」
パリン。

オレンジ色の浮遊結晶が割れた瞬間、重力が戻ってみんな床に落ちる。

「きゃっ!？」

「ふげ」

俺の顔の上には、イグニールのケツが降ってきた。

柔らかい、役得だ、なんて思うじゃん？

違うんだな、尾てい骨が当たって痛いんだ。

「ご、ごめん、トウジ」

「いや、大丈夫……」

潰された鼻を押さえながら何とか立ち上がる。

しかし、浮遊結晶すごいな……周りにいる人数とか物の量関係なしに浮かんでいた。
無重力空間を発生させるようなものなのだろうか？

「娘ちゃんさ、それ……どうやって作ったんだい？」

「液化した魔力ガスがあっただろう？」

俺がフアントムバルンを倒した時に渡したタンクのことだな。

「アレの作り方を調べていて、強い圧力を加えると気体は液体になることが判明した」

「そうだね。気囊の予備ガスとして飛行船に積んでおこうかって話になってたね」

オスローの言葉にオカロが反応する。

「その液体化したものとアマルガムをどうしても組み合わせたい衝動に駆られてしまったな」

オカロが扱いは危険だと俺が旅立つ前に釘を刺していたにもかかわらず、オスローは小さな液体化ガスを作り出して実験してみたそうだ。

稀少鉱石のアマルガムと液体化したガスでは何の反応もみられないのだが、そこに触媒となる鉱石を加えることでアマルガムが反応して小さな結晶が生成されたらしい。

それをかき集めて固形化したものがオレンジ色の結晶だってわけだ。

「色々試したのだが、基本的には金、もしくは白金が適していた」

生成された結晶はどれも浮遊の効果を持つのだが、その中でも魔力と反応して周りを浮かせるほどの力を持っていた触媒は金と白金だったらしい。

これらの素材は魔力との親和性が高く、ロスが少ない魔導体としての役割を果たすそうなの。

「もう、話についていけないわね……」

「俺も」

素直に両手を上げるイグニールに同意しておく。

俺もその辺はまったくわからない。

精密機器などに使われているものだと捉えれば良いのかな？

「私はかねて開発していた巨大バッテリーとこの浮遊結晶を巨大化したものを組み合わせることによって、邪魔な気囊なんていらずに船は浮くと考えたのだよ。そっちの方が軽量化にも成功するし、馬鹿デカくしなくて良いだろう？」

「でも、まとめて浮いちゃってたら意味ないし？」

スツと疑問に思ったことを口にしたと思うのだが、珍しくジュノーから鋭い指摘が出た。

「フフフ、その辺は心配ないさ。魔力の方向性や対象を選別する仕組みは、長年のアーティファクト研究にて大いに発展を遂げているわけだから」

「んー、よくわかんないし？」

「つまり、物を冷やす魔導機器だってそういった応用がなければ周りのありとあらゆる物を冷やしてしまうことになるだろう？ 火をおこす携帯コンロだって制御しなければ周りが大火事になるとは思わないか？ 他にも、バッテリーだって魔力を放出する方向性を決めなければただ魔力を垂れ流すゴミと化す。古代の賢者が作り出したアーティファクトの何が、どうして、どうなっているのか、それを考えるのがアーティファクト研究、そしてそこから生まれたのが魔導機器。日進月歩す

る技術力の前に、細かな疑問なんて障害ではなく解明されるべき謎でしかないのだよ！」

すごい勢いで語り出すオスローだったが、ジュノーは一言こう言った。

「早口でよくわかんないからパンケーキで例えてもらえないし？」

「パ……パンケーキで例えろとは、なかなか面白いことを言うね、君……」

ジュノーは思ったことをすく口にしている性格だから、別にさらっと流しても良いのだけど、オスローは律儀に考える。

「一般的なパンケーキの作り方は決まっているだろう？　そこに少しアクセントとアレンジを加えることによって極彩諸島の七色パンケーキや他のパンケーキへと変貌する。同じパンケーキだが……つて、これはちよつと違うか……」

「あたしは食べる専門だから、さっぱりわかんないし！」

「ぐむ……ちよつと待ってパンケーキを作ってみようか。そこから良いたとえを見つけ出し……」

「待って待って待って」

パンケーキを作る流れになり始めていたので、慌てて止める。

話が脱線するどころではなく、すり替わって別のものになっていた。

とにかく浮遊結晶を使った飛行船が、オスローの理想とするものであることは理解した。

どでかい気囊を持ったものよりも全てをとっぱらったシンプルな空飛ぶ船。

俺もそつちの方がファンタジーの世界っぽくてかっこいいと思った。

「恐らく、C・Bファクトリーが着手している飛行船は従来のものだろう。浮遊結晶と竜樹を用いたものは私たちの技術の結晶であり最高の強みになると私は思っている」

「そう、だね……」

オスローの言葉を聞いたオカロも同調するように頷く。

敵さんも設計図がないとはいえ、何とかして飛行船の製作に着手しようとするはずだ。

空路を最初に手に入れることは大きく、是が非にでも取りにくるだろう。

そんな彼らを出し抜けるような、革新的な最新技術は勝敗を大きく分ける。

「素材は俺の出番ってわけか。じゃあ、白金を採ってくれば良いのか？」

白金で作られた貨幣の価値は100万ケテルと非常に高い。

しかし、材料だけならジュノーのダンジョン部屋で無限に手に入るのだ。

そこから貨幣を作れば億万長者になれるよな、なんて思うけど……そんなことをしたら絶対にバチが当たりそうなのでやめておく。

「いや、またしても無理難題を言ってしまうことになるのだが」

俺の問いかけに、オスローは首を横に振った。

「無理難題？　まあ、話だけは聞くよ」

「白金以上の最高の素材があり、それを見つけてきてほしい。その名もヒビイロカネ」

「ヒビイロカネだつて!？」

オカロが大きな声を上げる。

「娘ちゃんまた無理難題押し付けて！ 竜樹よりも希少な伝説の金属じゃないか！」

「あらゆる金属の性質を持ち、朽ちないと言われている伝説の金属。それがあれば、この状況を完全に改善できると踏んでいるのさ」

「いや、だからってそんなものはもうずっと昔の文献にしか載ってないし、ダンジョンでも採れた記録は極々僅かで、今では本当にあるのかも怪しいレベルだよ？」

「知ってるさ、パパ。でもあるんだろうか確実に？」

オスローは瞳に強い光を残したまま言葉を続ける。

「だったら探せば手に入るかもしれない。トウジはなんだかんだそういつた運に恵まれているタイプの人間だから、きっと私は見つけてきてくれると信じている。明確な根拠はないが、私の勘がそう告げるのだよ」

「でもさっ！ 竜樹よりも情報が少ないものを今から探すのは手間が掛かるよ！ やっぱり気囊式にして民間に卸して運用していかないと、コストと時間だけを浪費してせっかく雇った研究員も養えなくなるって！」

どこまでも夢想する娘と、それを制する現実的な父親の口喧嘩。

お互いに口が達者だから言い争いは続く。

「竜樹が手に入ったのなら、そのために用意していたお金が浮いているだろう？」

「あのね、敵の庄もすごい状況でマイヤーちゃんが他の商会との交渉を引き受けてくれてるんだよ？ あまり余裕ぶっこいてる余地はないんだから、もっと現実的に考えた方が良くパパは思うんだよね」

「でも、それだと良いのが作れない……もん」

「駄々こねても譲らないよ！ まったく凝り性は僕の父さん譲りだね？ 開発は自分のためではなく人のためにするものなんだから、一点物じゃなくて誰でも気軽に使える簡単でローコストなものを目指さなきゃダメだよ！」

「むぐう……費用やその辺の話をされると、さすがの私でも言い返すことができない……」

「今までは自由を認めてきたけど、そこは断じて譲りません！ そもそも出資されたお金は規模拡大のために戦略的に使わなきゃ、どこかで絶対にパンクしちゃうんだよ？」

お金の話を持ち出して、ややオカロ優勢になってきたところで、俺はインベントリからあるものを取り出した。

「あっ、話の途中で悪いんですけど、はいヒイロカネ」

実はあるんだよな、その伝説の金属。

レシピは以前手に入れていて、材料もほとんど揃っている状況だった。

ヒイロカネは技能【巨匠】で生成可能。

だとしたら俺が作らないわけがないだろう？

もつとも、ヒヒイロカネを使用した装備を作るには【神匠】からじゃないと無理だった。だからヒヒイロカネはインベントリの肥やしになっていたのだが、これがあれば色々と捗るって話ならばどうぞ使ってくれて感じてある。

「……は？」

いつも半目で何を見据えているのか、何を考えているのかわからないオスローの表情が、珍しく大口を開けて啞然としたものになっていた。

「ト、トウジ……も、もう一度言ってくれるかい……？」

「ん？ はい、ヒヒイロカネ」

露骨に狼狽えるオスローの表情は新鮮で面白い。

しっかりと目を見開いていたら、目の周りの隈があまり目立たず、それなりに美人に見えた。

「今、私の目の前にある太陽のような明るさと光沢を持つ、やや黄色を帯びた赤色の丸い石の玉が……ヒヒイロカネだつて？」

「うん」

「……もう一度言ってくれ、これが、何だつて？」

「いやもう良いよ面倒臭い。そんなに疑うなら鑑定士にでも見せてきたらいい」

ここにあるのは紛うことなきヒヒイロカネ。

ありとあらゆる希少金属を合成して生成される伝説の合金なのである。

「こ、これがヒヒイロカネの現物だと仮定しよう。しかし、どこで手に入れたんだ……？」

「自分で作ったよ」

基本的な材料はアダマンタイト、オリハルコン、ウーツ、白金、玉鋼、アマルガム。

これらの他に、浄水を瓶単位で百本と賢者の石を百個くらい使用する。

浄水を清水から作るレシピは妖精の楽園を助けた時にロウエンから聞いた。

だが、賢者の石のレシピは持っていない。

賢者の石は、オリハルコンやアダマンタイトなどの希少鉱石を使った装備を分解することによって、一定確率で入手することができる。だが、秘薬やコレクトの効果を用いたとしても割と低い確率である。

しかし休むことなく装備を作り続けてきた俺に死角はない。

インベントリの中には失敗作の装備が大量にあつて、そんな装備を絶え間なく分解リサイクルしていたが故に、賢者の石を大量に抱え込んでいたのだ。

他の素材も色々と入手困難なのだが、質より量を優先し続けた結果、ヒヒイロカネを大量に生産できる分の素材は揃っていたのである。

戦闘において俺はなんら役に立たないが、こういった素材等の事前準備に関しては無類の強さを発揮できるのだ。

「じ、自分で作った……？ そ、そんなことがあるのだろうか……？」

「まあ、実際にここにあつて持つてた俺、本人が作ったって言ってるわけで」
「しかし、しかししかししかししかし！」

目をパチクリとさせながら理解しようとするオスローだが、彼女の頭脳をもつてしても理解が追いついていないようだった。

そりゃそうか、俺も理解してるわけじゃない。

結果的にできたらそれでオツケーなのであった。

「トウジ、詳しく話を聞くことは？」

「それは秘密」

「むぐぐ」

「まあほら、ポチをもふもふして一旦落ち着いてくれ」

説明したとしてもよくわからないだろうから、適当にあしらっておく。

「あ、ああ……もふもふ、しかし、もふもふもふ……」

「ア、アオン……」

ブツブツと呟きながら一心不乱にもふもふするオスローと、ため息を吐きながら大人しくもふもふされてあげるポチだった。

すまんな、囧おどろにしてしまった。

「ヒヒロカネ自体はあと十個くらいストックしてあるよ」

「あつ、うん」

「足りる？」

「えつ、うん、足りるというか……一個でいい……」

やけに大人しくなつてしまったオスローだが、まあ良し。

「まあお、我が娘が庄倒されてるところなんて初めて見たよ」

そんなオスローの姿を見て、オカロがピューッと口笛を吹いていた。

ヒヒロカネの利用は【神匠】からであり、そこに行き着くまで単純計算でもあと半年以上はかかりそうな具合だった。
だから今持つてる分はあるだけ使つてもらつて構わない。

「とりあえず予備も合わせて十個渡しておくから、好きに利用してくれ」

「う、うむ……」

「何だか扱いが軽過ぎて本当にヒヒロカネなのか逆に疑いたくなつてくるね」

確かにすごいものだってことはそうなんだけど、今の俺からしたらそう価値はない。
下手に売つぱらつてライバルに買われるよりも使うべきところにあるのが良いだろう。

「こ、これだけあるなら存分にテストができるな！ うむ、そうだ、そうしよう。色々な懸念が晴れた今、ただ狼狽ろうたするのではなく……空を目指さなければ！」

頬を両手でペシッと叩いたオスローは、そう宣言して何とか気持ちを持ち直した。

「足りなくなったら言ってくれば準備するよ」

「ありがたい。ヒイロカネを使う前に白金を使った浮遊結晶で制御方法を調べてみるつもりだったのだけど、現物があるのならば話が早い。さっそく私は諸々の作業に取り掛かる！」

「娘ちゃん、僕も手伝うよ。とりあえずこの場以外で竜樹とヒイロカネの件は口外しないようにしようか。プロジェクトは気囊式の飛行船改め……えっと、浮遊結晶を使った飛行船でいいのかな？」

今までの飛行船とは一線を画す大掛かりな変更に、オカロは首を傾げる。

そんな様子を見てオスローは胸を張って言った。

「これは私が作り出した新たな空へのアプローチ……飛行船と名付けよう、パパ」

「違う感じが出てて良いね。じゃあ、これからは飛空船と呼ぼうか」

良い名前だと俺も思った。

さて話もまとまったところで、もう一つだけやっておくことがある。

「オスロー、もう一つ話があるんだけど」

「何かね？ ポチをもう一度もふもふさせてくれると言うのか？」

「それはポチ次第だけど、嫌がらない方法くらいだったら教えてあげられるよ」

「む、教えていただくよう」

「簡単なことだよ」

毎日俺の家の浄水温泉に浸かり、寝る前にチョコレートを少しだけ食べる。

食い過ぎは良くないが、気持ちをしラックスさせる程度に摂取するのだ。

この親子にはそれが一番必要なことである。

「……意味がわからんな」

その旨を告げると、オスローは露骨に眉を顰めた。

「風呂なんて一週間に一回入れれば十分だろうに」

「毎日入れよ」

一週間に一回とか、舐めてんのか。

今は冬場だけど、さすがにそれは汚いし絶対にポチが嫌がる行為である。

「あと寝る前に甘いものを食べるのも、逆に脳に栄養が行き過ぎて寝れなくなりそうだ」

「だったら甘さ控えめタイプもあるから、それを少量食べてみてくれ」

「まあ、だったら良いだろう。それでポチを抱っこさせてくれるならばな」

「オッケー」

勝手にオスローと話を進めてしまったが故に、ポチが俺のふくらはぎをサンドバッグにして猛抗議をしているのだが、敢えて無視することにした。

どうせどつかしらのタイミングで何か適当な理由をつけて、ポチを抱っこさせろとかオスローは

言ってくるんだから、清潔になつてもらつといた方が良いだろう。
オスロー浄化作戦、密やかに開始だ。
ポチを与えれば言うことを聞くから楽だよな、このパンダ女。

第二章 Aランク遠征討伐依頼

「お久しぶりです、トウジさん！」

「お久しぶりです」

俺たちは久しぶりにギリスの冒険者ギルドへと顔を出していた。
担当受付であるエリナの顔を見るのも久しぶりである。

「もうこの街から他に移っちゃったのかと思つてましたよ！」

「その時は言いますよ」

「ちなみに、今までどこに行つてたんですか？」

「ストリアまで遠征しました」

「また遠いですねえ……旅行ですか？」

「そんな感じですよ」

出先で色々あったのだけど、語るのも面倒なので適当に話を合わせておく。
食い道楽旅行みたいな側面もあったのだから、間違いではない。

所属はギリスだつてことにしてあるから、いずれストリアの冒険者ギルドで行つた依頼報告も
こつちに届くはずだ。

その時に詳しくわかるだろう。

「いいなあ旅行、私は生まれてこの方ギリスから出たことはありませんよ」

「外は危険も多いですから、平和が一番だと思いますよ」

お金を貯めていつか他の国に旅行してみたいというエリナに言つておく。
魔物がいないならまだしも、そこら中にいるから街から出ない方が吉だ。

俺なんて弱い魔物しかいない平和そうな道で野盗に襲われた経験だつてある。
友達友達なんか、ゴブリンに襲われて今でもとんでもないトラウマを抱えている。

そのとんでもないトラウマに巻き込まれて、イグニールの側にいる俺の命も危ういかもしれない
レベルだ。

「何よ？」

ローディのことを想像しながらイグニールを眺めていると、彼女は首を傾げる。

「いやー、外には危険がいっぱいだよな？」

「そうね、自衛手段は持っておくべきよ。護衛を雇うとか」

「そうなんですか……平和な都会に生まれてよかったです……」

旅行に対して否定的な意見を述べる俺たちの姿に、露骨にテンションを下げるエリナだった。すまん、だが事実だ。

「とりあえず、Aランクの依頼で良いのいいですか？」

「おっ！ トウジさんから聞いてくださるなんて信用してもらえたようで嬉しいですよ！」

嬉しそうに机の中をガサゴソと確認するエリナの姿。

しばらく顔を出さなかったのに、俺向けの依頼をファイリングしてくれているようだった。

ファーストコンタクトは面倒だなど思ったけど、なんだかんだ努力家というか、しっかりしてくれているので、俺は彼女にそれなりに心を許している。

「Aランクの依頼は、討伐よりも山脈での採取が多いんですけど大丈夫ですか？」

「それでお願います」

「トウジさん、今回も複数受けますよね？」

「もちろん」

Aランクの採取物なんて、それなりに傾向がわかっている。

っていうか、ダンジョン部屋にしこたま確保しているの、全部まとめて納品して依頼量をいただくというお手軽お金稼ぎなのだ。

「エリナくん、ちょっと良いかな？」

「え？ はいはい、何でしょう？」

依頼書を準備するエリナに、横からやってきた他のギルド職員が耳打ちをする。

「……つてところなのだけど、頼めるかね？」

「えっ？ えっと、一応聞いてみますけど……指名はNGですよ……？」

どうやら俺に対して指名依頼のようなものが入っているみたいだった。

申し訳なさそうに伏し目がちで俺を見ながら、エリナは言う。

「Aランクの依頼でちょっと戦力が足りないかと判断されているものがあるんですけど……」

「一応話は聞きます」

そこまで申し訳なさそうにされて、話も聞かずに断ったら俺が悪いみたいじゃないか。彼女も上司に言われてやらされているのだろうし、話を聞いてから判断することにした。

「ありがとうございます！ 依頼はワイバーンライダーの討伐です」

「ワイバーンライダー？」

「はい、ワイバーンを操る魔物です。どうやら、ギリスの山脈で目撃されたそうで」

「へえ、知らない魔物ですね」

素直にそう答えると、イグニールが補足してくれる。

「確か元々はタイムスキルを持ったゴブリンだったはずよ？」